

## Yさんとの出会いから私が学ばれること

金沢信一

### これまでの経過

#### 私とYさんとの出会いの経緯

私とYさんが出会ったのは、私が当時所属していた社会福祉法人の入所施設にYさんが三年間の有期限の入所生活（強度行動障害特別処遇事業）をしていたときのことでした。Yさんは、その施設の個室で暮らし、日中は、施設内の別の棟にあるパン工房に通い、パンづくりの作業をするという、一見すると問題が感じられない生活をしていました。

私とYさんとの出会いは、Yさんの三年間の入所の二年が経過し、あと一年で退所し、生活してきた地域に戻る準備に向かうという時期でした。Yさんが生活していた地域、東京都のある区での、父、母、姉の暮らす実家に戻り、そこからその地域の知的障害者への通所施設に通う生活を行う、という先が見え始めた頃でした。Yさんが実家に一時帰宅をし、その後、施設に戻ってこない、ということが起こりました。そのため、その入所施設の支援員が実家にYさんをお迎えに行くと、Yさんは応じず、支援員は、Yさんに噛まれそうになり、施設に連れて帰ることは出来なかったとのことでした。私は、Yさんのことを全く知らなかったのですが、Yさんの実家に赴き、施設まで一緒に帰って来ることを施設の責任者から依頼されました。

私がYさんに関わるにあたって、Yさんが暮らしていた生活棟の担当者にYさんがどういう人なのか聞いたのですが、話しだけでは良く分かりませんでした。Yさんが帰園しないという事態は、Yさんの視点に立てば、家族や地域から離れ、入所生活という慣れない暮らしから逃れて、家族や知人のいる慣れ親しんだ地域で暮らしたいと考えるのは当然のことだと思います。ですが、Yさんが地域を離れ、3年の有期限であるにしる他県にある入所施設で暮らすことになったのは、それなりの事情があるはずで、ひと言で強度行動障害と言っても、その状態は多様であり、私は、その理由が具体的には分からず、それを知りたいと思いました。

例えば、入所生活は、どこまでYさんの意思を尊重した入所だったのでしょうか。地域で暮らすための生活訓練が目的で、有期限ではあっても、一定の制度を用い、入所の生活を送る訓練とは何だったのでしょうか。支援者間にもその目的は必ずしも明確に理解されてはいず、共有されてはいなかったように思います。

当然ながら、Yさんは、施設内の支援者であっても、誰とでも同じつき合い方をしていたわけではありません。とても好意的な支援者もいれば、表情が分からない支援者もいたように思います。私は、強度行動障害棟を含む生活グループの支援者ではないので、常時、Yさんのそばにいるわけではありませんでしたが、本人の要求があれば、連絡を受け、時にはドライブをし、牛丼やカレー南蛮を食べ、その間、私とことばでのやり取りをするなどして過ごしました。

Yさんは、2年間は支援の側が設けた生活の枠組みに、ほぼ従順に応じ、その暮らしぶりから周囲には問題が感じられませんでした。

### 実家に迎えに行く

私は、車を運転し、午前9時にYさんの家の玄関に着きました。Yさんの家は、いわゆる団地でした。玄関で待つと、Yさんは出てきません。待っていても出てきませんので、そこで1時間後にまた迎えに行くと、Yさんは既に出て行ったとのこと。待っても帰ってきません。お昼の12時過ぎに戻って来て、お腹が空いたのか、私に「ラーメン、食べるの。」と言います。そこで家の近くのラーメン屋さんに行きます。食べ終わると、自転車に乗り、また、どこかに行ってしまう。私には、この地域の地理、どこに何があり、Yさんがどこに行くのかがまるで分かりませんが、Yさんはこの地域について良く知っています。私は、こころの中で、Yさんを何とか車に乗

せて、施設に連れて行きたいという気持ちに満ち満ちています。それはYさんに伝わっていて、家に戻ろうとして私がいるのを見ると、どこかに逃げていく、ということがくり返されました。

Yさんが当時地域で行っていた活動を手伝う

Yさんは、ビールの空き瓶を回収し、それを回収業者に持って行き、お金をもらう＝「仕事」を行っていたようでした。それは、Yさんが地域での支援者から活動支援として教えられたことだったようです。ただ、ビールの空き瓶は、母親がお金を出して購入し、瓶ビールを、どういう機会か分かりませんが、支援者に「飲め、飲め。」とふるまい、空き瓶にしたものということで、Yさんが空き瓶回収作業をやればやるほどお金がかかり、Yさんの収入にはなりません。ですが、Yさんはこの作業を気に入っていたようでした。

また、団地の庭は、団地で暮らす人たちのための共有の場だと思いますが、そこには箱に入った、回収されていないビールの空き瓶がいくつも積み重ねられ、土埃を被っていて不潔に見えました。団地に暮らす人たちにとっても迷惑なことだったでしょう。こうした作業活動は、当時のこの地域の支援団体が行ったものだと思います。家族は、Yさんがこうした活動や支援団体を気に入り、地域で支えようとしてくれる支援者たちとYさんをつなぎ止めるためにこうした支援を重要に思っていたように思います。

このときの私は、Yさんとしては避けたい、施設に連れていこうとする、Yさんの意向に反する嫌な存在になっていたように思います。私の存在にストレスを感じ、そのために私がいなくて母親を嘔んだことを母親から聞きました。

母親の力を借り、本人が親しんでいた地域での作業活動を手伝うことを手がかりにして、ビールの空き瓶を私の車に載せて、回収業者のところに持っていくことをYさんに提案し、Yさんは、そのために母親付きで私の車に乗ることを受け入れました。団地の庭に放置された多くのビール瓶は回収業者に持っていく作業の途中の状態であり、Yさんは、それらを回収業者に持って行きたいと思っていたようでした。

私は、たとえば、Yさんが思っているとおりに、Yさんが車に乗ってしまえば、こっちのもので、そうすればYさんを入所施設に連れて行くことは、何とかできるのではないかと考えていました。ところが、Yさんは、良く分かっていて、私が空き瓶回収業者の店の在る方向とは違う方向に向かおうとすると、Yさんには、すぐにそれが分かり、警戒的な口調で、「こっち！」と言い、行くべき方向に「指差し」をします。そのときに私は、以前の担当者が嘔まれそうになったという話しを思いだし、すぐに車の進路を変えます。Yさんの納得無しに、誤魔化しで、施設に連れて行くことは難しいと思いました。

ビール瓶の回収業者のところに運ぶことを数回くり返し、また、Yさんに施設に戻ることを車中で度々説得を試みましたが、Yさんの納得を得て施設に行くことは困難でした。

午前9時に始まった支援は、夜中の12時を過ぎ、その間に奇跡は起こらず、私がこれ以上粘り、施設への誘導を試みることはYさんにも家族にも負担の限界を超え、迷惑なだけと考え、これが最後と、Yさんに、初めて、言っても無駄だと思っていた、私が思うことを伝えました。

「お父さんが病気で、お母さんがお父さんとあなたと二人の面倒を見ることは出来ないので施設に行くんだよ。」すると、Yさんは、即座に「施設。行くの。」と言いました。

Yさんがその後の道中で帰園を拒否することは、ありませんでした。施設に着き、入所施設の夜勤者には苦情を言われました。私は、この間の、Yさんと私とのドラマティックなところの変化が感じられ、Yさんに清々しささえ感じていましたが、それと比べて、施設という囲いの中では、Yさんのところにある様々な事情は、支援者が理解しようと思わなければかき消され、遅く着くことが問題にされました。こうしたYさんの状況が入所施設内で一部共有されないことが残念に感じられました。

私は、Yさんへ施設に行つて欲しい事情を伝えようとしてしました。私は、はじめ、Yさんを誘導し、本人の理解ではなく、私の都合で連れて行こうとし、本人はそれを見抜き、拒否してました。私には、Yさんが、父親思いで父親や母親のためなら嫌な施設でのくらしも厭わないのであり、私は、Yさんと比べて人間として劣っていて、人間性の質の差は明らかにより感じられました。

Yさんは、父親の病気（パーキンソン病）について、とても心配をしていました。地域での実習の際に、私が通常よりも早く迎えに来た、と感じたのか、寝ていたYさんは、スッと起き上がり、「お父さん。死んじゃった。」と泣き始めました。私は、私が早く迎えに行った理由は実習に行かねばならないためであることを説明し、お父さんは亡くなっていないことを伝え、Yさんはそれを理解し、落ち着きました。

Yさんが地域で展開していたビールの空き瓶集めなどの活動は、Yさんにとっては良かれと思つて行っているものです。それは、地域の支援者たちとの間につくられたものです。これらは未完成と言うべきであつて、より良いYさんと地域の支援者との関係をつくれるのか、未成熟であるように思います。そして同じように私とYさんとの関係も十分なものではありません。それに比べるとYさんとYさんの父や母との関係はYさんにとって大変重要なものであることが分かります。

支援者がYさんの意に反してYさんを入所施設に連れて行くとすれば、Yさんが私に噛みつかうとしたとしても正当な行為のように感じられます。

#### 地域での実習を支える

Yさんが自宅の周辺にある通所施設に、実家から通う実習をすることになり、私がそこに付き添うことになりました。実家に迎えに行くと、Yさんは、必ずしも実家にいるわけではなく、日によっては地域でのこれまでの支援者と過ごした宿泊所のような場にいることもありました。Yさんは、支援を受け、地域でそうした場で暮らす生活をしていただと思ひます。家庭を中心としたYさんの地域での暮らしは、Yさんがこれまで地域での生活への支援を受けることに困つてつぐられ、繰り広げられたものだと思ひます。ですが、これらは、形ばかりのもので、支援者側の都合も含まれ、本当の意味での地域での他者との繋がり、理解や共感が得られるものではなかつたように思ひます。ですから、今後、繰り広げられる地域での実習についても同じように形ばかりの傾向を帯びる可能性があると思ひました。

通所施設では、当初、Yさんは、すぐには、作業活動の中に入ることは出来ませんでした。遅れて到着し、作業の場に入つていけず、廊下をウロウロしてました。私も一緒にいました。しかし、Yさんは、徐々に作業の場に参加し、作業能力は高い人なので周囲の支援者は目を見張るようだったと思ひます。最終日にはYさんと、母親、姉も参加して3人でリヤカーを引き、古紙を回収業者のところまで運び、Yさんの表情からは、この家族の長男としての風格が感じられました。

その後、通所施設で実習の反省会が行われました。この施設の支援者たちは、Yさんの葛藤に寄り添い、不安が軽減されることで徐々に作業に参加するようになっていったYさんと私とのつながりの意味については、理解してもらえなかつたように思ひます。たぶん、支援者たちは、私のようにYさんの拒否的な気持ちを受け容れるのではなく、作業を「やらせれば出来る」と思つていたのでしょう。そこで、私の付き添い無しで、もう一度実習を行うことになりました。

数週間後に、再度の実習が行われ、本人は、登所を拒否し、支援者が数名で無理に連れて行こうと抑えたら、本人は暴れ、母親が最も信頼していたはずの3年間の施設入所を進めた福祉司の眼鏡

を壊し、終了。即、Yさんは、精神病院に入院中とのこと。この間の支援は一瞬にして破綻したように感じられました。

精神病院に母親と面会に行くと、Yさんは、二人の屈強な介添人に付添われ、現れました。Yさんは、ボーッとしていて、強い向精神薬が使われていることが分かり、母親は、「こんなのYじゃない。」と、嘆いていました。その後、しばらくしてからですが、母親は、薬物療法を受け入れ、私のような支援者が側にいるわけではないので、やむを得ないと言っていました。悲しいです。

翌年から私は、ある県の入所施設の開設にたずさわり、本人と会うことは出来ませんでした。10年後、私は、その仕事から離れ、ある都立の入所施設に見学に行ったときに、そこで暮らすYさんに会うことが出来ました。奇跡のような再会。その支援者は、「Yさんは、一人で外出することも出来ていて、一番の退所候補です。」これは、この支援者からのYさんへの肯定的な評価であったと思います。そのとき私が近づくと、Yさんは、すぐに私のことが分かって、とてもテレていました。Yさんは、身長が165センチはあろうかと思いますが、私は、自分の気持ちが抑えられず、重いYさんをハグしてしまいました。また、会いたいです。

## エピソード記述

テーマ：Yさんとの出会いから私が学ばれるもの

### 背景

Yさんは、20代の男性。東京都のある区の団地で暮らしています。家族は、難病の状態にある父親、父とYさんを支える大黒柱のような明るくパワフルな母親、姉。Yさんのことばは、接続詞、助詞などは無く、文章としては不十分ですが、単語的なフレーズが連なり、ことばから本人の意を知ることは分かりやすいと思います。

### エピソード「高校ラグビー。お酒飲むか？」

ドライブのとき、私が運転をし、Yさんは、助手席に座ります。外から見るとYさんはまゆ毛が薄く、剃っているように見え、怖い人のように見えます。ですが、Yさんのまゆ毛が薄いのは、アトピーのせいで、搔いてしまうからです。

ドライブで並んでいると、Yさんは、私に「高校ラグビー、お酒飲むか？」と問います。私は、「高校生。お酒飲んじゃダメ。」と答えます。次に、Yさんは、「大学サッカー、ウイスキー飲むか。」。私は、「大学生は、お酒。飲んでいいよ。」と答えます。次に、「高校柔道。ビール飲むか?」といったように、次々と質問をたたみかけます。はじめの頃はこの対応に私は、不快感を感じ、そのくり返しにより不快な気持ちをさらに強め、Yさんは、そうした私の気持ちを感じ、質問は、終わりません。すると、私の不快感はさらにさらに強まるといふ悪循環に陥りました。こうした相互のこころとこころを感じる負の響きあいを私は体験しました。

ところが、そうした際に受ける側、私が、不快感ではなく心地良さを感じようになると、Yさんから私への質問は、短く終了します。この応答が私にとって不快に感じるものか、心地良いと感じるものかは、Yさんに伝わり、Yさんは私の思いを、心地良く感じるところを開くように思います。私にも同じことが起こっています。

### 考察

私が、Yさんとのことばでのやり取り、Yさんが「高校ラグビー。お酒飲むか。」と言い、私が「高校生。お酒飲んじゃダメ。」と応える、という対応でYさんが見ているものは、未成年者がアルコールを摂取して良いのかだけでなく、そうしたやり取りを私がどう感じているのかです。私は、当初、こうした対応を求められることに対して、ことばとして応えていましたが、こころの中では、不快な思いが強まっていったことは事実です。しかしながら、Yさんとのつき合いの中から、Yさんという人物の良さを自然に感じる様になり、もっと長く対応したいと思うよ

うになっていきました。私のところに心地良さが一杯になっていると、Yさんにそれが伝わるのか、高校ラグビーの対応は早く終わるようになっていきました。

自分で言うのもどうかと思いますが、私は、他者との気持ちのつながりなど自信が無く、シャイなど言えば良いことのように思われますが、見るからに、無表情で無愛想な人間です。それは正直なところ、何も感じていないのに相手に合わせてお愛想笑いをするなど出来ないためです。私がYさんとの対応から心地良さを感じるのは実態であって、私がYさんに何も感じていないのに愛想笑いをしてもYさんは見透かしてしまい、受けつけないでしょう。Yさんが見ているのは私の表情を通して感じる私自身の感情だからではないでしょう。

## メタ観察

人権感覚のズレを取り戻すにはどうしたら良いのか

私が空腹であるとか、喉が渴いたとか、お腹が痛いとか、何か不足を感じるたびに、それを分かって満たしてくれたり、それを満たすための方向を教えてくれる信頼できる身近な人、両親や祖父母、友人、師、上司という存在との「つながり」により、私は、生きてこられたように思います。他者とのつながりが薄まったときには、過ごしていくのも辛いと感じたこともあります。厳しく叱咤されたと感じたこともあります。また、ある人の庇護の中で身の程も分からず過ごしていたこともあった様に思います。

好ましい評価をしてきてくる好意が、好ましいつながりをつくり、それをベースに、私がYさんを好ましい存在であると感じ、それは支援の重要な基盤となるものであると思います。お愛想笑いをするのではなく、私が、相手から感じられる、好意の心地良さによって、Yさんは、私からのYさんへの評価を感じているように思います。

私がYさんとの会話に心地良さを感じることで、私の感じる心地良さは、Yさんにも心地良く響き、Yさんは、私から安心感を得て、警戒的な対処行動をせずに済む関係の好循環を生むように思います。それ以前は、Yさんは、私との会話から心地良さが感じられず、繰り返し、相互に不快感を増大させていました。これを関係の悪循環と考えます。Yさんの他者からの評価であるこだわりが強く、通じ合わなさ、悪循環を強める不快感、「障碍」と感じられる傾向は、こうしたYさんと他者との肯定と否定が錯綜することからつくられたものだと私は考えます。

私がYさんとの対応に心地良さを感じるようになったのは、出会いの当初からではなく、私がYさんの人間的な良さを徐々に感じるようになっていったことに因るように思います。私は、Yさんとの対応の当初は、Yさんとの会話に悩まされ、怒ることも出来ず、内面に不快感を募らせていたように思います。Yさんは、本当に不快な相手とはこころを遮断したかのようにこうした負の対話をくり返しました。「高校ラグビー。お酒飲むか。」という投げかけは、本来は、ジョークで、面白そうな話だと思いますが、その様に言われると、どうして際限もなく何度もくり返し応えなければならぬのか、という不快の念が相手に生まれるように思います。それは、支援者である私の側にYさんの思いが感じられず、煩わしさを感じたからだだと思います。

Yさんの人間性を認め、良さが感じられなければ、対話は不快なものであると思います。そこには、私は、人権感覚のズレが含まれているように思います。そこからYさんが警戒心を強め、他者の好意を感じにくくなっていったのではないのでしょうか。

Yさんがいた入所施設ではYさんは、生活棟の職員の何人かとは、好意的な対話が出来ていたように思います。これら言うなれば「開かれた対話」をつくる基盤は、相手への好意的な見方であり、好意をつくる相互の他者への評価、自尊感情の質が影響している様に思います。それが二者間の関係性のベースをつくり、お互いを支え合う基盤をつくっていくように思います。

こうした主体や関係性を考えない、支援の即物的傾向、行動のみを誘導しようとする統制、一定の行動をさせようとする刺激の制限、環境調整の試みを行う傾向が現在の福祉現場に多く見られることを耳にします。行動は目に見えるものです。しかしながら、今回、Yさんとの対応で明

確にしようとした、人と人の好意のはたらき合う相互関係、人と人の支え合う関係性の基盤となるひびきあいの質は、目に見える行動を求める方法では得られない、と私は考えます。